

実践 皇徳寺福祉館木いちご文庫

1 はじめに

木いちご文庫は、1992年（平成4年）から鹿児島市の皇徳寺団地の児童ルームを利用した地域文庫活動を行っている。

子どもが、一人でも手を伸ばせる場所に良い本をという思いから、ユネスコの寄贈100冊と市立図書館の団体貸出を受け、毎週水曜日絵本の貸出と、読み聞かせを行っている。

2 活動の様子

近年は幼い子とお母さんが多いので、親子で楽しむわらべうたとお膝で聞く絵本の読み聞かせ、また朝読のボランティアをされている人が絵本を借りに来られるので、年齢や場所にあった絵本のアドバイスをしている。

赤ちゃんの頃から毎週継続して文庫に来ている子どもは、10年近くその読書歴を見守ることができる。小学校に入学する前には、文庫の絵本をほぼ読破し、一人での読書につながるように幼年童話や昔話、児童文学をお母さんに読み聞かせするようにすすめている。



夏休みになると、一日児童ルームで過ごす小学生たちがいる。毎週水曜日の文庫の時間には館長や指導員の理解のもと、ゲームやおもちゃを片付けてもらい、異年齢で遊べるわらべうたをして一緒に遊び、おはなし会をしている。

年々、小学生の選ぶ本に格差が見られ、子どもたちが自分で選んで必ず楽しい本に出会えるよう書棚の絵本を厳選し、おすすめの絵本は数冊並べるようにしている。新刊の中から選書し、子どもたちに合わせて本をそろえ、古くなった本は同じものを買い換え、フレッシュな書棚を心がけている。

クリスマス会では、わらべうた、絵本の他に人形劇、子どもたちのハンドベル演奏などを行っている。また、毎月楽しんだ詩をまとめたアンソロジー「木いちご文庫詩のおくりもの」とささやかなプレゼントをしている。



絵本のカバーを利用したノートのプレゼント



「からすのぱんやさん」のパンのプレゼント

3 地域とのかかわり

地域の保育園，幼稚園，小学校，中学校からのおはなし会の依頼には，極力行くようにしている。文庫に来ていた子どもたちとの再会も楽しい。また皇徳寺には文庫よりずっと歴史のある「おひさまえん」という子育てサークルがあり，就園前の子どもたちとお母さんが週2回集まって活動している。そこへ毎月1回おはなし会に行っている。

また，近くに念願の谷山北公民館図書室ができた。地域の読書グループとしておはなし会などで協力できる場所に参加し，地域の図書室を盛り立てていきたいと思う。

ただし，新しい谷山北公民館図書室には，地域の資料が充分とは言えない。公民館講座で地域の歴史を学び，自主学習グループでその学びを継続して，その資料を図書室に残していきたい。

皇徳寺団地は中世の山城「苦辛（くらら）城」の跡にたっていて，苦しく辛いという城の名前から，文庫に来る子どもたちが皇徳寺小学校では幽霊が出ると話していた。くらはは胃腸に効く薬草の名で，それが生えていた由来から来ていると伝えた。皇徳寺の史跡保存や歴史も伝えたい。地域の歴史を知るとは，地域に誇りをもち，ひいては子どもたちが生きていく上での後押しになると思う。

4 終わりに

子どもと本をつなぐ人は，情報を追うだけでなく目の前の子どもをきちんと見つめ，子どもたちから学ぶということが大切だと思う。また，同じ文庫活動をしている仲間との勉強会で，子どもと子どもの本について課題を共有し学び合うことも力となった。

22年の文庫活動の中でも，子どもと本を取り巻く環境は随分変化した。子どもが生涯にわたり本と友だちになってもらうために，一人一人の子どもたちに添った読書支援が以前にも増して必要になっている。私たちはその小さな窓の一つとして，これからも楽しく子どもがのんびり本と出合える文庫活動をしていきたいと思っている。

また，お母さんたちに，子どもと本の楽しさを分かち合う喜びを伝え，次世代の読書活動のリーダーが育ってくれたらと願っている。